

仏教精神をふまえた看護の思想的支柱とその歴史

藤 堂 俊 英

A. 仏教は苦しみを癒すはたらきを備えたものを宝とみる価値意識を土台としている。

仏・法・僧の三宝は伝統的に良医 (vaidya)・良薬 (bhaiṣajya)・看護人 (upasthāyaka) という比喻で説かれてきた。その列挙順序をめぐって、病苦を実際に治癒するのは良薬であることから、法・仏・僧の順序の方がよいという主張もあったが、一人一人違う病いとその原因(苦・集)を見極め、適切な治癒の処方(滅・道)を選択できるのは良医であるから、仏・法・僧の順序でよいとされている(『阿毘達磨大毘婆沙論』巻第34)。そこには一人一人違う性格や資質や生き様としつかり向きあい対処する「対機」という姿勢がある。

〔補足〕

1. 仏教の四諦説(苦があるという真実―知るべきこと、苦には原因があるという真実―断すべきこと、苦が停止

した境地があるという真実—体得すべきこと、苦を停止する方法があるという真実—実行すべきこと」と、古代インドの治療論 (cikitsā-sāstra) の四部門 (病気、病気の原因、無病、薬) には、その骨組みにおいて共通するものがある。『佛医王経』・『医諭経』・Vyādhisūtra (sak. VI.)¹⁾ Yoga-sūtra-bhāṣya. 2.15²⁾。

2. 仏教では人と向き合うことを「対人」ではなく「対機」と表現する、その場合の「機」とは、仏法を「聞く人」あるいは「仏法を聞くこと」によって発揮されてくる能力」を意味する。初期仏教経典 (SN. 36.6『雑阿含経』巻第17) によれば、仏法に傾聴する人は第一の矢は受けても第二の矢を受けることはないという。赤さびは内部を侵食するが、黒さびは内部を保護するはたらきがあると言われるが、法然も語るように真理への傾聴は聞者の病苦を転重軽受させて行く(「浄土宗略抄」)。中国仏教(智顛『法華玄義』第六上)では、「機」に徹・関・宜の三義があるとみる。

3. 社会心理学者見田宗介の「仏教の〈教え〉の知恵に学ぶ、教育における〈間主体性〉の意義」(『京都フォーラム講演集・新しい価値観を求めて』NHK出版)では、ブツダの対機説法に教育準備の三段階を見てとり、ギビング・タッチング・ティーチングの三つをあげている。看護にもこうした対機の姿勢を生かすことができる。

4. スペインの 医学史家 P・L・エントラルゴの「古代ギリシャにおけるディアイタの意味」(H・テレンバツハ編集『精神医学治療批判 古代健康訓から現代医療まで』創造出版)では、「diet (ダイエット)」の原形である 'diata' (ディアイタ) が、もともと医術や宗教によるカタルシス(浄化)に裏付けられた身心両面にわたる健全な「生き方 (a way of living)」を意味する語であった所以が明らかにされている。そこにも古今東西に共通する人間の心性や価値意識を見ることができるといえる。

5. 「三宝」という価値意識の表明は仏教の他、ジャイナ教(正見・正知・正行—三徳ともいう)、老子(慈なるが

ゆえに能く勇なり・儉なるがゆえに能く広なり・敢えて天下の先とならず、ゆえに能く器長を成ず）、孟子（土地・人民・政事）、道家（目・耳・口）などにも見られる。

B. 仏教は四苦八苦に翻弄されるのではなく、苦しみの逆縁を向上の縁として転換していくところに、人間の尊厳をみる。

ゴータマ・ブツダの誕生伝説として「七歩」の歩行と「天上天下唯我独尊」の宣言句が知られている。この句を伝える漢語訳仏典の幾つかは、その後に「尊」たる所以を語る生老病死の苦を共に克服していくという意味の文言を置いている。苦しみの逆縁を向上の縁へと導くには、仏法に傾聴する善友（善知識）の役割が重視されている。人間の尊厳を見失うことのなきよう、「看病の善知識」として病者の傍らに立つところに仏教精神をふまえた看護の特色がある。

〔補足〕

1. よく知られた誕生偈として「天上天下唯我為尊、要度衆生生老病死」（『長阿含経』巻第1、大本経）、「我於天上世間最上尊、我当一切衆生生老病死」（『四分律』巻第31）などがある。高楠順次郎は『佛教に現れたる互尊と獨尊』で「佛教はその自體が互尊である」という。
2. 初期仏教經典の『中阿含経』所収「天使経」（MN. no. 130. Devadūta-sutta）は、生・老・病・死・罰の苦を背負っている人が、私たちに生活の改善や改良を促す「デーヴァ・ドゥータ（天使）」であると説いている。イ

ンドの仏教サンガでは、その『天使経』に基づく絵が教育的配慮のもとに修行僧の浴室に描かれていた。『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻第17。

3. 仏典は善知識（善友）性について、七項目から十項目にわたる規定を施している。『四分律』巻第41の衣健度では「与え難きを能く与える・作し難きを能く作す・忍び難きを能く忍ぶ・密事を語りて・相い発露せず・苦に遭つても捨てず・貧窮なるも捨てず」の七項を、『佛性論』巻第2では憐愍（能く施す・重んずる・信ずる）聡明（能く説く・深きを説いて善友となす）堪忍（能く忍受する）の三徳六項とそれらが統合された「善友を安んじて善処に置く」の全七項を、『法苑珠林』巻第51の善友篇では次の十種の過失を離れた者を善知識と規定している。無寡聞失・無退行失・無散乱失・無輕慢失・無顛倒失・無貪求失・無瞋恚失・無邪行失・無著我失・無小行失。仏教は善知識に親近することを仏道の全因縁とみる（SN. 45.2）。永観（1003-1111）の「病はこれ真の善知識なり」（『拾遺往生伝』巻下）という言葉は、仏教者の病いに対する姿勢を端的に示している。

4. 歴史家アーノルド・トインビーは『歴史の研究』の世界教会（universal church）を論ずる中で、ギリシャ悲劇の作家アイスキュロスの『アガメムノン』に出る‘*pathēi mathos*’（苦痛を通して学ぶ）を精神的な進歩の法則と捉えている。日本の近世・近代の仏教僧風外本高（1779-1847）の書画の中に、「福は内 鬼は外」を万葉仮名風に「不苦者有智 遠仁者疎道」と表現したものがあがるが、東洋版パトス・マトスといえる。

C. 大乘仏教は理想的人間像として、自らを利する「自利」と他者を利する「利他」の双方に取り組み「共利（二利）」の人をあげる。それは自らを育む「育自」と、共に育つ「共育」という二つの「育」を両輪・両翼とするところの共生と、そこから生まれる成熟を重視するからである。

「共に」という意識が大切にされる所以は、何事も相互依存 (inter-dependent) なくして自立 (independent) はありえないという仏教の根本理念 (縁起) に裏打ちされたところの智慧と慈悲の実践を促すからである。仏教サンガにおいて病人が出た場合、あらゆる手段を尽くして看病すべしとの法が制定されたのも、このような理念に基づくものである。スベシ (should) という当為に説得性をもたせるためには、カクアル (be) からという根拠を示す必要がある。

〔補足〕

1. 仏教サンガは共住・共語・共食 (samvāsa. sambhāsa. sambhoga) などを通しての和合を特質とする。『瑜伽師地論』菩薩地二利品。空間を共にする (共住)、共に語り合う (共語)、糧を共に受用する (共食) は看護においても大切な要素である。

2. 龍樹『十住毘婆沙論』序品には「世間に四種の人あり。一には自利、二には利他、三には共利、四には不共利。この中、共利の者の能く慈悲を行いて他を饒益せば名づけて上人と為す」とある。

3. 「共生」については、たとえばアリストテレスの『ニコマコス倫理学』ではポリス的人間の本性として 'σύγγη' (共生) をあげている。また日本語では「社会」と翻訳される 'society' は、古くは「同伴」「仲間」「交際」「社友」などと訳されているように、元々は「親しみのこもった結びつき」を意味する語である。「共に」という意識はどのような集団においても相互信頼と維持に関する大切な要素である。

4. 自利・利他二利 (共利) への取り組みが仏法を介した成熟を各自にもたらすことについては、大乘の出家・在家の双方に説かれた三聚淨戒 (攝律儀戒・攝善法戒・攝衆生戒) の中で説かれている。そのうち病者看護につい

ては善行を積集する撰善法戒と衆生を利益する撰衆生戒の中で説かれている。とくに撰衆生戒では病者の同行者 (sahāya) となり、説法を通して病いの恐れを除き憂いを離れしめる戒めがあげられている。初期経典では善き同行者 (kalyāna-sahāya) は、善き同朋者 (kalyāna-sampavāṅka) と共に善知識 (kalyāna-mita) の同義語として使われている (SN. 3.2.8)。

5. 「精進」の原語 *vīrya* は、元々「打ち勝つ力や勇氣」を意味する。晩年、宗教学者エリアーデと交流し仏教にも関心をもった宗教哲学者、キリスト教神学者ティリッヒは“Courage to Be” (『存在への勇氣』) の中で、「勇氣の理解は人間と世界の理解、およびその世界構造や価値の理解を先行条件として示している。それを知っている人のみが、何を肯定し何を否定すべきかを知っている」と述べている。人間や世界の構造や価値の理解を踏まえた生命観や生死観をもつことが看護の質を左右する。病人に真の勇氣と精進への道筋を気づかせることも、仏教精神を踏まえた看護がなしうる事柄である。大乘仏典ではその人を護る法 (|| 徳) の衣として、被甲精進衣・柔和忍辱衣・慚愧衣の三衣があげられる。

D. 仏典で「看護人」を表す語の一つに「傍らに立つ人」を意味する「ウパスターヤカ」がある。病者の傍らに立ち、温めたり冷やしたりするはぐくみ (羽含) の *'incubation'* (抱卵、孵化) を通して、病人が病に立ち向かう力を育むところに看護人の役割がある。仏教では新しい宗教的生命の誕生を、「時に随いて覆蓋し、時に随いて温暖し、時に随いて看視し」 (『中阿含経』第56「心穢経」) とか、「時に随いて消息し、愛護し、将養し」 (『雜阿含経』卷第33、第322経) というように、適切な時 (クロノスではなくカイロス) を生かす無明の卵殻啄破の譬えで説く。禅仏教でいう啐啄同時もこの流れを汲む語であろう。

「看護」の「看」は「手」と「目」の組み合わせになっている。仏教では眼・耳・鼻・舌・意の六根がそれぞれに持つ知覚作用を、対象と直接接触することによって成り立つ合中知（鼻・舌・触）と、対象との間に距離を確保することによって成り立つ離中知（眼・耳・意）に分けている。これによれば、看護は離中知の「目」と合中知の「手」の組み合わせによって病者を護るいとなみということになる。衆生救済の菩薩、千手千眼観音の手にはそれぞれ眼が置かれている。

「補足」

1. 仏教教育の基本姿勢を表す語に「愛敬」がある。相手との距離をどこまでもミニマムにする愛 (preman) と、相手の自立と尊厳のための距離を確保する敬 (gaurava) のバランスがうまくとれるところに教育の目ざすものが実現されて行くという（『阿毘達磨大毘婆沙論』巻第29）。この姿勢は看護にも共通する。

2. 慈悲は一般的にそのはたらきが抜苦（悲）与楽（慈）と説明されている。慈悲による実践徳目として四摂事（施—法施・財施、愛語—慈愛の言葉かけ、利行—他を利用する行為、同事—歩みを共にする）がある。

3. 仏教の感覚論では「目」と「耳」に ‘armabhava-parikarsana’（導養自身・導護自身）という機能をみとめている（『阿毘達磨大毘婆沙論』巻第百十二、根蘊。『俱舍論』巻第三、根品）。なおステイラマティ（安慧）とプールナヴァルダナ（満増）の『俱舍論』の注釈書は「導養自身」を「生命 (jiva) の障礙を遠離する」という意味であると説明している。離中知・合中知は古蔵『法華義疏』巻第十一などに出る。矢吹慶輝は「眼耳二根は佛教古語に所謂離中知なり。此の故に諸宗教に於ける主客両体の窮親的関係の事例に於いて、視聴の現象多きに居るを見るなり」（『宗教界』第九卷第二号所収「声の宗教と宗教の声」と述べているが、病者と看護者の窮親

的關係においても視聽は切り離せない感覚である。

4. 手のはたらきは合中知でいえば触覚になるが、病者をなでる釈尊の手が苦しみを癒したという伝承（『摩訶僧祇律』巻第28、『十誦律』巻第28）は、看護における手の役割の大切さを伝えている。山形孝夫『治癒神イエスの誕生』にはこれに類する聖書の伝承が紹介されている。

5. 「看護」を表すヨーロッパ語を見ると、英語の 'nurse' は「養う」あるいは「養うもの」を意味するラテン語に由来している。一方、ドイツ語やフランス語では「病者の世話」をいう 'Krankenpflege'、'soin infirme' で看護を表している。尚、アプテの英梵辞典の 'nurse' の項には、母たることを意味する 'mātrkā' や、付き添うことを意味する 'upacārika' などの語があげられている。

6. 天平5年、遣唐使の船が難波を出帆する時、随行員の母が詠んだ「旅人の宿りせむ野に霜降らば 吾が子羽ぐくめ天の鶴群」という歌（『万葉集』第九）に「羽ぐくむ」という語の出典がある。齋藤茂吉『萬葉秀歌』下巻。

E. 農耕的思考法が色濃く反映されている仏教思想に福田思想がある。例えば、敬田（仏や僧）や恩田（師や親）や苦田（病人や貧者や旅人）に施しの種子を蒔けば、やがてその施者に福 'puṇya' という果がもたらされるといのである。看護人が苦田としての病人の中にある成熟への可能性を引き出し、互いに喜び合える心の実りが結実して行くとすれば、それは病人・看護人双方にとっての成長となる。

「福田」は今日では「仏教社会福祉の理念を知る語」（岩波仏教辞典）として捉えられている。日本では四天王寺に悲田院・施薬院・療病院、東大寺に悲田院・施薬院が置かれたように、福田思想は「仏教徒の社会的実践の基

本」として展開して行ったのである。

〔補足〕

1. 敦煌莫高窟第296窟（北周、556-581）主室窟頂北面東半には『福田経』に基づく変相図が描かれている。そこには病者に薬を飲まず僧などが描かれている。また大乘ボサツ戒を説く代表的經典『梵網経』の不看病戒では、諸の福田の中でも「看病福田これ第一の福田なり」と病者の苦田に寄り添う施行のもたらす福が強調されている。
2. 福田思想はジャイナ教にもみられるが、釈尊が誕生し仏教が展開した地域は釈尊の父「浄飯王」の名や仏典に種子という譬喩がしばしば使用されることにも窺えるように、米などの農耕地帯である。『雑阿含経』巻第四「耕田経」やこれに類するSN. 7.2.1; Sn. 1.4『別譯雜阿含経』巻第十三、『尊婆須蜜菩薩所集論』巻十、『大智度論』巻第二十二などの所説は、農耕風土を背景に転変する環境に対処しながら成熟に向けての育む営みの大切さを伝えるものである。

F. 歴史的にみれば、古代インドにおいて今日のような合理的な医療の技術を持っていたのは、仏教サンガとアーユル・ヴェーダの医師団であった。仏教サンガには医療や薬や看護に精通した「治療比丘」「見病比丘」「薬師」が存在していた。

仏教がインドからアジアの国々に伝播し根をおろしていく場面には、医療にまつわる技術が重要な役割を果たしていたと推測できる事例がある。また中国仏教や日本仏教の歴史を見ると、中国仏教では唐代以降、特に日本仏教

では平安時代から江戸時代にいたるまで、終末看護や終末用心をとりあげる典籍が多く著されている。それらに傾聴することによって、今日にも生かせる終末看護に関する、また生と死の教育に関する叡智を発掘して行くことができよう。

〔参考文献〕

1. 岩本裕 「第三の医学・アールヴエーダ」インド医学序説」(『日本臨牀』第30巻第5号〜第31巻第3号)
2. ケネス・G・ジスク著・梶田昭訳 『古代インドの苦行と癒し』時空出版。訳者は佛教大学通信教育課程・仏教教養講座に籍を置きながらこれを訳出している。
3. 『HOBOGIRIN 法寶義林』三、Paul Demiéville; 'BYO' 日佛会館。尚この「病」の項目にはMark Tatzによる次のような英訳がある。“Buddhism and Healing” University Press of America 1985
4. 服部敏良 『釈迦の医学』、同 『奈良時代医学史の研究』など。吉川弘文館
5. 宗田一 『日本医療文化史』
6. 新村拓 『老いと看取りの社会史』 『死と病と看護の社会史』など。法政大学出版会
7. 富士川游 『日本医学史綱要』平凡社 東洋文庫
8. 藤腹明子 『看取りの心得と作法17条』青海社
9. 『カトリック大辞典』、『新カトリック大辞典』、『キリスト教大辞典』には今日までのキリスト教の歴史における医学や看護に関する項目がみられ、中には仏教における看護に言及した箇所もある。
10. 水谷幸正編 『仏教とターミナル・ケア』(法蔵館) と藤本浄彦・藤堂俊英編 『仏教と看護』(法蔵館) 所収の拙稿「仏

- 教看護の基本とその原型」。初出は平成4年科研究報告書『仏教とターミナル・ケアに関する研究（その3）』。拙稿「仏教経典にみる看護論」（平成7年科研究報告書『ターミナル・ケア従事者の教育に関する研究』所収）
11. 長谷川匡俊・田宮仁・神居文彰・藤腹明子編『臨終行儀』

*この拙稿は佛教学部における「仏教と看護」、看護学科における「仏教看護論」の講義をもとに、平成30年1月17日に水谷幸正記念館で行った最終講義の資料に加筆修正したものである。